

石見海域漁場保全調査（食中毒原因細菌調査）

（漁場保全対策推進調査事業）

石原成嗣・井岡久・開内洋

1. 研究目的

腸炎ビブリオによる細菌性食中毒の発生件数は、戦後、安全衛生管理に対する各方面での取り組みにより減少する傾向であったが、ここ数年の食中毒発生件数の第1位になるなど増加傾向にある。これは、感染力の強い血清型 O3:K6 株の増加によるものと考えられており、漁業の現場サイドでの対策が求められている。

今回、当該菌による漁獲物の汚染対策の一資料とすべく、石見海域の沿岸部における、腸炎ビブリオの発生状況を調査した。

2. 研究方法

試験船「明風」により、浜田・江津・温泉津沖 1～3km の沿岸海域の表層海水を 1ℓ採取した。

海水は試験場に直ちに搬入後、速やかにフィルターで濾過を行った。濾過済みのフィルターを 100ml の食塩ポリミキシンブイオン中に投入し、18 時間培養後、TCBS 培地上で画線培養を 18 時間行った。そして培地上に現れた緑色コロニーのうち、オキシダーゼテストが陽性であり、且つ 0・10% 食塩加ブイオンで生育せず、3・8% 食塩加ブイオンでの生育が確認できるものを腸炎ビブリオ陽性とみなした。

3. 研究結果

	温泉津沖	江津沖	浜田沖
H13.7.2	陰性	陰性	陰性
H13.7.18	陰性	陰性	陰性
H13.8.6	陽性	陰性	陰性
H13.8.27	陰性	陰性	陰性
H13.9.18	陰性	陰性	陰性
H13.10.9	陽性	陰性	陰性

4. 研究成果

島根県沿岸の腸炎ビブリオ発生状況を把握することで、今後の水産物の衛生管理対策への手がかりの端緒となりうるか、その評価も兼ねて実施したが、漁場環境あるいは品質管理の評価指標として、重要な情報になると考えられた。

より精度の高い調査とするためには、耐熱性溶血毒産生株の定量も考慮する必要がある。